

佐野正巳先生を悼む

外国語学部長 日 高 昭 二

心臓の加療を長いあいだの懸案とされていた先生が、入院されて手術に臨まれるという知らせを、奥様からのお手紙でうかがったのは、昨夏の記録的な暑さがつづいていた日の朝であった。速やかなご回復を願いつつ、術後早々にお見舞いすることを心決めて、その機会を押しはかっているうちに、先生の訃報を、かさねて奥様から頂戴することになったのである。医学の進歩は、誰でも口にするが、当節のそれは、この程度のものかと、しばらく怨嗟の思いにかられつづけた。

それから、ひと月ほど後のことであつたらうか、奥様はご子息を伴われて研究室の整理におとずれた。訪問の前日にご連絡があり、蔵書の中で役に立つものがあれば、主人の形見と思つて手元に残されたしというお話である。遠慮なく頂戴することにして、しばらくぶりに研究室に入ると、迷路のように配架された本棚にギッシリと詰め込まれたその量の多さと、関心領域の広さに、あらためて驚いたことであつた。目の前では、お二人がせつせとご本を整理されているのであるが、その手がちよつと休むたびに、どちらともなくため息がもれる。聞けば、ご自宅の

蔵書にもまだ手がついていないというのである。まさしく、先生は、本を友とし、本とともに生きた方であったと、しばし瞑目したことであった。

佐野正巳先生は、一九七〇年に神奈川大学に助教授として赴任されている。教養科目の日本文学を講じられたほか、英語英文学科の専門科目である日本文学特殊講義や、大学院修士課程でも日本語・日本文化研究の講義などを担当され、また図書館長や法人評議員なども歴任されている。

周知のように、先生は、万葉集や風土記の研究で著名であるが、おそらく宣長などの国学や、母方の曾祖父とのご関係などを通じて、近世の学芸史の世界に深く分け入られ、島根大学山陰地域研究センター研究員として、また同県の教育委員会の依頼によつて、松江藩や津和野藩の儒学・漢学・蘭学・洋学の資料発掘とその改題・解説に従事されていたのである。あの二葉亭四迷の漢学の師であった内村鱸香についての伝記考証を、こういうものを書きましたといつて贈られたときは、いまでも記憶にあたらしい。

そういう先生のお仕事が多忙を極めるようになったのは、汲古書院から続々刊行された『詩華集 日本漢詩』と、その続編『詩集 日本漢詩』、さらに『紀行日本漢詩』というアンソロジーの編纂であつたらう。そのために収集・購入された、和本・板本・版本のご家蔵は、一体どれほどにのぼつたことか、想像するのもむずかしいが、しかし、そのために払われた熾烈な多忙さが、先生の心臓にどれだけのご負担となつたかを想像することは、容易であらう。

とはいえ、それらのお仕事は、作家である中村真一郎氏などによつて高い評価を得ていたことは、私ごとき門外漢が述べるまでもないことである。たとえば、先生最後の著書となつた『万葉の世界とその周辺』について、中村真一郎はその『読書日記』のなかで、「金石学による中国との比較研究、視野広がる。国立博物館の法隆寺奉獻展

での白鳳期の展示物の印象と重なり感銘」と記しているが、そこに二人のゆるぎのない親交のさまが垣間見えるとはいえ、知る人ぞ知る学問のけわしさ、愉しさをうかがわせる評言でもあろう。

そういう先生のご生涯は、近来の常識でいえば、むろん短いことを恨みとするが、ときに先生のご長男が学問への道を選ばれたとも聞く。先生から多くのことを学んだ者たちにとっては、それをせめてもの慰めとする以外にはないであろう。